

| | |
|------------------|---|
| Title | 伸縮為替相場と交易条件 |
| Sub Title | Flexible exchange and terms of trade |
| Author | 白石, 孝 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1953 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.1 (1953. 1) ,p.53- 56 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19530101-0053 |
| Abstract | |
| Notes | 学会展望 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530101-0053 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

口増加率の遞減(資本節約的な技術的革新)フロンティアの消滅の四つの経済的社会的条件をあげて長期沈滞論を展開した。之等に對する批判はターボア(註8)を始め多く存する。しかし現今において之等経済的社会的条件を考慮せずして経済現象の解明は不可能であり、更にケインズ、ハンセンの理論は實際に政策的に役立つたのである。ただそれは一時的ではあつたが。その點ハンセンの長期沈滞論も果して長期理論であるか否か検討されるべきものではある。彼は四の条件をあげているがその理論内容はケインズ理論と大差はない。正に「近代理論は短期の範圍を餘り出していない。長期における實質賃銀と利潤率との變化、資本蓄積の進歩獨占の發達と衰退社會の階級構造におよぼす技術的變化の大規模な反作用」等の考察が重要となる。シュムペーターもこの點において再反省されるべきものといえる。(註9)以上で本稿の論述を終ることになるのであるが後半特に長期沈滞理論については敘述が不充分である。後日の機會に譲りたい。

- 註1 Sweezy, "Schumpeter-Imperialism and Socialism," Introduction New York, 1951.
 註2 O. H. Taylor, "Schumpeter and Marx: Imperialism and Social Classes in the Schumpeterian System," Quarterly Journal of Economics, November, 1951.
 註3 Theodore Morgan; Income and Employment, 1947.
 註4 Lloyd A. Metzler and Others; Income, Employment and Public Policy. Essays in Honor of Alarin H. Hansen. New York, 1948. (邦譯所得雇傭及公共政策上卷三十三頁)
 註5 參照 W. J. Fellner, "The Influence of Market Structure on Technological Progress," Quarterly Journal of Economics, Nov. 1951.
 註6 Lloyd A. Metzler and Others. (邦譯三十四頁)
 註7 Hansen; Fiscal Policy and Business Cycles.
 註8 G. Terborgh; The Bogy of Economic Maturity.
 註9 中山伊知郎編 資本 河出書房 百六十八頁

学界展望

伸縮爲替相場と交易條件

白石 孝

國際收支の調整をいかなる視點から考え、どのような政策を採用すべきかということについて、われわれはまだ多くの未解決な問題をもっているけれども、modern economist の「國際收支の均衡・不均衡」に關する考え方の結論は、「それを一國の對外經濟活動を含めての全經濟活動の決定諸要因の均衡の上に規定する」ことであり、政策的には「國內均衡を犠牲にして國際均衡に到達することを不可」とする點にある。勿論この「國內均衡」なる意義はマルクセのいうような「インフレを惹起することなく維持し得る最大の國民所得、雇傭水準」であるが、ケインズがこの二つの均衡の調和的な實現について最もプリミティブなかたちで提唱したところのものは、周知の如く、爲替相場の自由變動を認めることと、人為的な手段によつて資本支出量を調節することであつた。(註1)しかし、前者に關連して、他國の經濟變動より隔離するを得るような國際貨幣制度への實

伸縮爲替相場と交易條件

際的要求に對し、右の基調からならぬかの解答が準備されなければならなかつたことはいふまでもあるまい。伸縮爲替相場の效果分析がその一つである。事實、國民經濟をして金本位の束縛から脱せしめ、經濟變動より隔離せしめんとする國際貨幣制度の提唱のなかには、大部分この伸縮爲替相場のそれを含んでいたからである。しかしながら、これと固定爲替相場 fixed exchange rate と對比して、どちらが前述の目的を果し得るかということについては種々異論がある。例えば、伸縮爲替相場は可成りからの變動から安定國を孤立せしめ得ると考へる見解や、その變動が價格變動よりなれば效果的であるが産出高とか雇用の變動よりなれば必ずしもその機能に期待し得ないとするものもある。(註2)問題はこれをどう考へるかである。本稿はまずメツラーに沿いつつこの點から出發し、更に最近とりあげられた爲替相場——交易條件のメカニズムを中心とする景氣調整のための國際經濟政策の效果分析の一端にふれたいと思う。

- (註1) R. F. Harrod, International Economics, 19, chap 7.
 (註2) J. E. Meade and C. J. Hitch, An Introduction to Economic Analysis and Policy, 1938. A. P. Lerner, The Economic of Control, chap 28 の「興味あるもの」L. W. Mints, Monetary Policy for a Competitive Society, chap 5, 1950.
 (註3) S. Laursen and L. Metzler, Flexible Exchan-

ge Rate and the Theory of Employment, R. E. S. Nove 1950.

二

メツツラーの論點はこうである。伸縮爲替相場において、他國の經濟變動の波及が、ただ資源のシフトに終り産出高水準に影響を與えないと考へるのは誤りであつて、そのような結論がひき出されるのは、貨幣所得水準一定とし、國內品及び輸入品に對する總支出が相互に輸入価格の騰落とは無關係に不變であること。換言すれば、輸入品支出増加なら國內品への支出が同じ割合で減少するという條件を假定するところにある。しかし支出のスケジュールというものは所得だけの函數ではなく、交易條件にも依存する。即ち、たとえ輸出價值が常に輸入價值に等しくとも、交易條件の變化はあり得、これが國民所得の支出スケジュールに變化を與える可能性は充分であるという。

今A・B二國があり、A國の所得擴張のB國への波及を考へる。當然この國際收支「ここでは單純に資本移動なしと假定」への攪亂的作用は、爲替の需要が充分彈力的とすれば、B國品への需要増加↓A國爲替相場騰貴↓A國輸入減・輸出増↑B國輸出減・輸入増の均衡化メカニズムにより調整されるが、この場合、B國の輸出は舊均衡時よりも増加しており、従つて、新しい均衡はこれと等しい輸入増加を生じたことにより成立したものとわなければならない。たとえば、この額を二百萬弗と

する。問題はこの新しい均衡が、B國の産出高における變化を含まず、國內産業より輸出産業への資源の單なるシフトをもたらしにすぎないという考へ方で、これによれば、輸入品支出増加と同額の國內品支出の減少二百萬弗をみ、その結果、たとえ輸出生産が二百萬弗増加しても、他方に國內生産が同額だけ減少せしめられたとする。メツツラーはしかしこの點を批判し、新しい均衡時において交易條件はB國に有利に變化し、右のような産出高不變は生じ得ない。むしろ、そのためにB國の産出高は國內支出のヨリ以上の減少をもたらす可能性があると云うのである。勿論彼の批判の對象とするかくの如き見解は多くの文献にも散見し得るところであつて、さきにかかげたL・W・ミンツの「國際的攪亂の國內的調整」は勿論のこと、J・E・ミードの「國際收支論」も同斷とみられるであらう。

かくてこれよりする固定爲替相場と伸縮爲替相場の對比はもはや明白である。前者にあつては、外國よりの産出高水準に對する波及経路は交易條件と貿易差額の二つであり、後者にあつては前者の効果のみであるが故に、「一國の産出高は外國の景氣循環から著しく隔離され……その依存は間接的となりかつ弱い」ことが認められる。しかし、たとえ貿易差額の變動が伸縮爲替相場下において除去されたとしても、交易條件の變動が一層重要な効果をもつものであることは記憶されるべきである。

(註1) S. Larsen and L. Metzler. op. cit. p. 288.
(註2) L. W. Mints. op. cit.

ミンツの問題は國際收支攪亂に對して均衡回復のためにとのよるな國內調整が必要かを検討することであり、固定爲替相場と伸縮爲替相場をこの點から對比することである。特に國內調整には資源と消費のシフトを必要條件とし、兩制度とも、國際商品の産出高が國內品のそれと逆に増減する姿を畫こうとするもので、右のシフトだけを效果分析にとりあげよう。

(註3) J. E. Meade, The Balance of Payment. 1951

これについては本誌第四十五卷第九號拙稿参照。

(註4) S. Larsen and L. Metzler. op. cit. pp. 189-

三

以上の伸縮爲替相場と交易條件の問題は、更に一層新しい政策的な問題に連なるものとして注目されなければならない。即ち交易條件の變化がもたらすであろう國內的效果から、逆に國內均衡維持のために交易條件を變化せしめるような爲替相場調整策が實際に考へられるからである。たとえば、R・F・ハロッドの一九五一年におけるスターリング引上の提唱をみよ。周知の如く、彼のこの主張の根據は、交易條件の有利化がインフレ抑制効果を有するとみるところにあり、朝鮮動亂後の英國の經濟事情からスターリング引上によつて交易條件を有利化して右の效果を求めようとするものであつた。しかし、問題は通貨の對外價值引上↓交易條件有利化↓インフレ抑制効果の二つの

伸縮爲替相場と交易條件

環節をいかに考へるかにある。既に第一の環節、通貨の對外價值引上↓交易條件有利化については、數多くの論議が行われて来たところであるが、なかでもR・ヒンシヨウの反論は注目し値いするものであつた。彼はハロッドのようなこの關係への過大評價をいましめ、對外價值引上が交易條件を繼續的に改善し、引下がこれを悪化するとみなすのは、古典的な分析にすぎず、「注意深い理論分析や統計調査を缺く」といふのである。しかし、小國の場合と大國の場合との差異を強調し、前者にあつては、爲替相場の一方的變化はその國の交易條件に對して、これがこれが外國通貨のタームでの輸入價格にわずかし影響を與えるため、重要な効果をもち得ず、後者の場合にはこのほぼ反對の傾向にあるが、米國の如く輸出が大きく輸入需要が小であるような國では交易條件はさほど影響されぬとしその變動も一時的であると指摘する。更に現實において、一九四八年英國が平價切下を行つた折、たしかに同國の交易條件は悪化した、事實上反對の現象を生むべき米國が、朝鮮動亂以前に、同じよりに交易條件が悪化したことをとりあげて、一義的な關係を否定するに至つてゐる。勿論かかるヒンシヨウの反論や例證を、われわれはそのまま受取ることは危険であるかも知れない。しかし、これが事實である以上、これに對する理論的説明が必要であることも當然であらう。とりあげられた例證は現實の米英兩國の交易條件であつて、彼によれば、兩國は製造品輸出、原料品輸入において世界を支配し、従つて、世界恐慌時には共に

書評

經濟研究委員會編

「景氣變動の諸問題」

National Bureau of Economic Research
Conference of Business Cycles.

鈴木 諒 一

有利に、今次大戦後には不利に變動しているのは驚くにたらず
ことであり、ドルスターリング相場の變動によつて交易条件
が影響されるという意見を論證出来ないというのである。^(註1)特に
工業國の交易条件の戦後における悪化や原料國のその改善は
爲替相場と多くは無關係であることから、爲替相場調整による
ところの交易条件の人為的改善、ひいてはそのインフレ抑制効
果を疑うのであつた。これに關して最近ヒンショウが簡單な論
評を試みてはいるが、^(註2)この問題は、單に通貨の對外價值引上
交易条件改善(國內景氣調整(インフレ抑制)というハロッド
の提唱に對する検討の餘地を指摘するものにとどまるまい。同
様のことが、メツツラーの伸縮爲替相場の効果分析についても
いえるであらう。即ち、そこにおける結論は、交易条件の變動
を通ずる産出高水準への影響が伸縮爲替相場についても生ずる
という可能性をもつてあつたが、ヨリ積極的には所謂貨幣
的調整の限界がこの點からも明示するべきであつたのである。
(註1) R. F. Harrod, Revolution of Sterling, Fi-
nancial Times, april. 25. 1951.
(註2) R. Hinshaw, Currency Appreciation as an
Anti-Inflationary Device, Q. J. E. Nov. 1951.
(註3) ibid, p. 456.
(註4) ibid, pp. 459-461.
(註5) A. O. Hirschman, currency appreciation as
an Anti-Inflationary Device, Q. J. E. Feb. 1952.

本稿で紹介しようとする Conference on Business Cycles, New York, 1951, pp. IV+422 なる著書はケインズの出現以後最近において特に盛になつてきた所得分析を軸とする計量經濟學の見地から景氣變動を分析しようとするもので、Klein の "Economic Fluctuations" や Tinbergen の "The Dynamics of Business Cycles" 等と同一流向の論文集である。National Bureau of Economic Research によつて發行された J. Tinbergen, Gottfried Harberler を初め、比較的新進の多くの學者が名を連ねてゐる。本書は三部から成り、第一部が General Papers でインバナーを初め、A. Burns, Carl Christ, Tinbergen, Schumpeter, R. A.

Gordon の諸論文が含まれている。第一部の總頁数は二三四頁であるが、この中最も多くの頁数が割かれてゐるのは Carl Christ の A Test of an econometric Model for the United States, 1921-41 なる論文でこの論文及びその批判に九六頁が割かれてゐる。第二部は Profits, investment and Business Cycles で一四四頁が割られてゐる。Hultgren, Klein, Abramovitz の三人の論文が載せられてゐるが、Tinbergen の Studies in Investment Behavior なる論文がその批評をも加えて八六頁を占めてゐる。第三部は Business Cycle Research and Policy で八四頁、C. A. Wright, Haberler, A. Smithies の三人の論文を掲載してゐる。この三つの論文の中ではライトのものも最も長く四六頁である。元より、これ等の論文の凡てを紹介する餘裕はないが、先に指摘した主要論文の内容を紙面の許す限り紹介して行こう。

先ずクライストの論文であるが、この論文は次の十二の章によつて構成されている。第一章計量經濟學の模型。第二章構造方程式組織の誘導形、第三章 Structural parameter, 第四章誘導形における Parameter, 第五章クライストの模型Ⅱ、第六章クライストの模型Ⅲに關するマーシャルのテスト、第七章クライストの修正、第八章テストの内容、第九章 Computation の計畫。第十章計算の結果、第十一章結果の吟味。第十二章結論、この外に七つの附録と、クライスト、ティンバールゲン等の批判がある。一見して解る様にこの論文はクライストの

景氣變動の諸問題

“Economic Fluctuations” における模型Ⅱ(この模型については三田學會雜誌昭和二六年八・九月號參照)に關する批判を中心としたものであり、クライストの模型が戦前の一九四一年までで終つてゐるのに對して、同じ模型を一九四八年までの資料に照して見てその妥當性を検討しようとするものである。先ず第一章において計量經濟學の模型の性格が論ぜられる。典型的な實驗を行う場合には、實驗擔當者は他の凡ての變數の値を固定しておいて、只一つの變數だけを觀察する。より複雑な事態の下では、單一の變數の性格を研究する代りに單一の關係に對する研究が行われる。ところが經濟學者は例えば供給函數と需要函數の如くに、二つの關係が齊一次に充されなければならぬと考へる。この齊一次の方程式を「構造方程式」structural equation は觀察不能の random shock を含んでゐる。動態過程を考へる上には時の要素を入れて考へなければならぬ。更にKをもつての経過に拘りなく固定した數値としGを以て外生變數とする。計算を簡單にするため、各パラメーターは一次の値であるとし、巨視的數量を取扱うものとする。これだけの前提の下に次のことが云える。CVYを夫々消費投資、所得とすれば

$$\left. \begin{aligned} a_1CY + a_{12}Y + a_{13} &= Y_1 \\ Y - C - V &= 0 \\ \phi(m) &= N(0, \sigma^2) \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (1)$$

N(0, σ^2) は、平均値 0 Variance σ^2 なる形の正當分布を示す